The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ジェイムズ・ウィリアムズ著『ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』』（未邦訳）James Williams, Gilles Deleuze’s Logic of Sense : A Critical Introduction and Guide,Edinburgh University Press, 2008.
Author(s)	多田, 雅彦
Citation	メタフュシカ. 2009, 40, p. 125-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9777
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《文献紹介》

ジェイムズ・ウィリアムズ著
『ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』』（未邦訳）

James Williams, Gilles *Deleuze's* Logic of Sense : *A Critical Introduction and Guide*, Edinburgh University Press, 2008.

多田雅彦

本書はドゥルーズの主著の一つである『意味の論理学』[1]を扱った世界初のモノグラフと呼べる著作である。著者であるジェイムズ・ウィリアムズ[2]は 2003 年に既に『差異と反復』に関する同様の本を出版しており、本書はそれに続く一つの成果といえるであろう。これまで、『意味の論理学』は、例えばそこで導入された〈出来事〉や〈反-実現〉といった概念をめぐって、多くの解釈者たちによってドゥルーズの存在論や潜在性の哲学に関する理解の根幹に置かれてきた一方で、その内容の難解さや合計 34 の〈セリー〉と 5 編の付録からなるスタイルの異様さゆえにしばしば「奇書」とさえ看做されるばかりではなく、ガタリとの共同作業の開始以降のドゥルーズの変化や彼自身による否定的言及が、ドゥルーズ哲学全体の中でのこの著作の位置づけを困難にしてきたという事情もある。そうした中、本書において、『意味の論理学』の中で扱われた諸々の概念に関して網羅的な解説が試みられていること、そして体系だった解釈が、明快で肉付けされた仕方で提示されていること等はまず評価すべき事柄である。また、本書の特徴としてドゥルーズが展開している議論をテクストがおかれた歴史的文脈の中に位置づけるよりむしろ一般的・普遍的見地から捉えようとし、さらには『意味の論理学』をその時代に限定されない価値を持つ一つの「実験的」な試みとして位置づけていること、が挙げられる。

本書の構成について言うと、事実上の序論に当たる「『意味の論理学』への序説」と題された

---

1 Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969.［邦訳：『意味の論理学』小泉義之訳、河出書房新社、2008］また本稿ではドゥルーズ独自のタームに関しては全て〈・〉で括る。

2 James Williams はリオタールとドゥルーズの専門家でスコットランドの Dundee 大学で教えている。とりわけ最近は初期のドゥルーズに力が入れられており著作に *Gilles Deleuze's* Difference and repetition, *a Critical Introduction and Guide* (Edinburgh University Press, 2003) やドゥルーズと同時代の哲学者達との比較を行った、*The Transversal Thought of Gilles Deleuze: Encounters & Influences* (Clinamen Press, 2005) などがある。

第 1 章において著者の解釈の概要が述べられる。第 2 章から第 5 章まで、著者が設定したテーマに従って区分され、原書の順序に概ね即しながら、『意味の論理学』本編に関する注解が試みられる。

第 1 章で、まず著者は、『意味の論理学』は、セリーと出来事のあるいは著者が潜勢的なものと現勢的なものの「相互規定」と呼ぶ過程に従って「新しさ」や「創造」を肯定する理論を展開するものであるということを述べ、それから『意味の論理学』で問題となっている〈意味〉(le sens, sense) の概念に関して、感情 (feelings) の「増減する強度」や「価値」という解釈を与え、それによって『意味の論理学』を一種の生の哲学 (「道徳哲学」) の展開として理解しようとする[3]。それに加えて『意味の論理学』の独特のスタイルに関する著者なりの見解が述べられる。

第 2 章「言語と出来事」においては文字通り言語と出来事の関係が問題となる。そこでは、著者独自の、「相互規定」という概念に基づいた解釈が展開される。著者の議論を理解するためには、『意味の論理学』の冒頭 3 つのセリーに対応する、生成変化としての〈出来事〉、ストア派の〈物体／出来事〉の概念、〈命題〉という三つの主題を著者がどのように取り上げているかに注目するのが適当であろう。まず、生成変化としての〈出来事〉は、先に述べたような〈意味〉として捉えられる限りパラドクス的な対象となる。著者はパラドクスは、「我々が言語がそうであると理解しているものに対する拡張を要求する」(29) と述べている。ところでドゥルーズは第 3 セリーにおいて命題を分析しながら、命題の指示・表出・意義作用という 3 つの機能に還元されない第 4 の次元として〈意味〉を導入していた。著者はこれを、〈意味〉が、3 つの機能に還元されない「意義 (significance)」や「価値 (value)」を命題に与えていると解釈する (46)。そして〈意味〉は、指示や意義作用と「関係を断つ」ゆえに、本質的に定式化や厳密な定義の対象にならないのであり、言語の過程そのものにおいて「領域自由な」仕方で「経験的」に提示される必要があるとされる (49)。そしてこの「経験的」な提示は第 3 章において「実験的な方法」として取り上げ直されることになる。また「命題について」のセリーは、命題の機能に関する形式的な議論というより、言語の「過程」に即した経験的な議論として取り扱われている。

〈意味〉あるいは「強度的変化」は、ドゥルーズのストア派解釈に従って、現勢的な出来事乃至変化の (表面) における〈結果＝効果〉として概念化されていると著者は言う (31)。しかしドゥルーズが〈反−現勢化〉[4] (著者の解釈では、その出来事の「再演」) という概念によって捉えようとした事柄を理解するためには、つまりこの「変化」を反復との関係において理解するためには、〈意味〉は、むしろ、時間と空間において起こっている現勢的な出来事とは区別される潜勢的な出来事としての「不定法」(to love, to fear 等) の間の「強度的関係」の変化、或いは「一

3　こうした理解は、『意味の論理学』そのものよりむしろ『アンチ・オイディプス』における「欲望機械」論を示唆するものであるように思われる。また評者からみて、〈意味〉のこの解釈は、言語哲学と実践哲学の短絡を可能にすると同時に、後者において導入される〈反−実現〉という概念の理解を平板なものにしているように思われる。

4　“counter-actualisation”, « contre-effectuation » の Lester & Stivale による英訳であり〈反−実現〉と訳してもよいが、ドゥルーズが actualisation と effectuation を区別していることと、この語に含まれる effect という語を考慮しつつ解釈すると〈二重因果性〉に関する著者の解釈 (cf. p.130-1) と矛盾することや、著者が “virtual” という語を使用することからこのように訳す。

つの生に於いて表現されたものとしての全ての不定法という背景に対する」その場所で起こっている出来事によって表現される不定法の「強度的関係」における変化として捉えられなければならないとされる（37, 33）。そしてこの不定法は言語の審級である〈高所〉に位置づけられ、それゆえに、言語は〈意味〉と関係を持つとされる（33）。ここで出来事の反復は〈深層〉に位置づけられる現勢的な出来事のそれであるが、これは潜勢的な出来事によって初めて連絡をつけられるとされる（35-6）。

このようにして、著者においては「現勢化」も「反−現勢化」も共に、「セリーと出来事の」あるいは「現勢的なものと潜勢的なものの相互規定」と呼ばれる過程として捉えられてゆく。つまり、潜勢的な出来事は事象相互の連結や系列として現勢的出来事を規定しているように見えるが、他方で〈意味〉はそのような事象系列によって表現されなければ、そこにおいて現出しないのである。そして、「反−現勢化」は、ある一定の現勢的な出来事（あるいはそれと結びついた変化に関する事実）においてなされる新しさや創造の生産であるが、にもかかわらず潜勢的な場（諸不定法とその相互関係）におけるその動詞の〈意味〉の変容、それによって感じられる「強度」によってなされなければならないというのである。

第 3 章「出来事としての哲学」において著者は、ドゥルーズの形而上学を場所論的に定義する、観念的な審級である〈高所〉、質量的審級である〈深層〉、およびその間の境界である〈表面〉に関する説明を行い、そしてドゥルーズの超越論的哲学、その実質を構成する〈静的発生〉および〈動的発生〉を独自の観点から位置づける。

まず、3 つの場所論的審級は全てこれまで述べてきたことの説明に必要不可欠なものとして肯定される。〈高所〉はラカンの「大文字の他者」によく似た概念で、真理あるいは〈声〉の審級、プラトン的「イデア」の審級として位置づけられる。その為、通常の解釈ではそれを「転倒」し、〈深層−表面〉というストア派的な二元論を打ち立てることが問題となるが、著者によるとそうではなく、〈高所〉も不定法も含めた言語が存立するための場として先に述べたような過程のファクターとして必要なのである。そしてまた、本書においては、物体の〈結果〉としての出来事というストア派の概念は、存在論的な因果関係に於いてではなく、変化として捉えられるのであった。これらの点から、〈動的発生〉の「唯物論的」解釈、即ちそれによって物体的〈深層〉から、超越論的場や多様性や不定法そのものの形成が説明されるという解釈が批判される。

また著者は〈意味〉を命題の機能から区別する先の議論を、「超越論的演繹」即ち「常に実在には現勢的な事物やその因果関係以上のもの［= 潜勢的な出来事および〈意味〉］があることを証明する」論として捉え直し（97）、これをカントにおける可能な経験のアプリオリな条件の探求やフッサールにおける「現象学的還元」に代表される、「超越論的演繹」の系譜に連なるものとして捉えようとする（97-106）。しかしこの「演繹」はある一定のよく基礎づけられた基盤の上に立って行われるのではなく、反復を通じて行われるヒュームの「実験的方法」に連なるものとされ、これがドゥルーズにおける〈超越論的経験論〉なのだとされる。

著者は、この観点から〈静的発生〉に関する解釈を行っている。ドゥルーズの「発生」の概念は通常フッサール的な意味で解され、〈静的発生〉は同一性や真理の説明（命題の 3 つの機能の〈意

味〉による説明）として捉えられる。しかし著者は「発生」とは「創造や誕生それ自体というより、むしろ諸特異性の創発であり、それ故また、同定された諸事物のダイナミズムである」[5](p.125)とする。つまり問題は同一性をその一面として含むような過程となる。そして著者は〈静的発生〉と〈動的発生〉を静力学および動力学との類比によって提示しようとする。つまり前者はある一定の平衡状態から次の平衡状態への移行として捉えられる過程に関わり、後者はその平衡状態の「境界を切り裂き乗り越え」てゆく過程に関わるとされる。そこに於いて〈意味〉が演繹されかつ、現勢的なものと潜勢的なものの関係が明らかになるとされるのである。

こうして〈静的発生〉に関して、まずある同定可能な対象に科学的な分析には収まりきらない――例えばある人が誰かにとってもつ固有の――「意義」や「価値」といった類の規定が与えられると同時に、〈意味〉がこの経験に尽きるものではなく別の経験に「開かれた」ものとして反復されることによって、「不定法」がその対象の同一性に還元されないもの（述語と区別される表現されたもの）として区別されるという二重の過程が「〈意味〉の演繹」の実質を成すとされる（126-7）。

次に、「道徳と出来事」と題された第4章に於いて『意味の論理学』の第20セリーから第25セリーが「道徳」哲学の展開として位置づけられ、その説明が試みられる。ここで「道徳」とは、命令や強制や倫理的境界づけあるいはそれに関する同意などではなく、たとえそれらに関わるとしてもそれに先立ちそれを部分として含むような、「出来事との関係における創造性の道徳哲学」であるとされる。ここでは主体や自己や個体というより個体化に関わるような道徳が問題となり、この意味の道徳は人間に特化されるものではないと著者は言う。

このような道徳哲学は、ストア派からとられた諸原則に則って展開されるという。また著者は、アルトー、キャロル、ブスケ、フィツジェラルド、ペギー、クロソウスキーの作品において、「出来事とともに行われる道徳的な苦闘のより詳細な原理」が提示されているとし、ドゥルーズはこれらの作家に関する芸術論を展開しているのではないとする（151）。そしてドゥルーズの〈クロノスとアイオーン〉という時間論が新たなものの創出との関係で捉えられる。また存在の〈一義性〉という概念が、「全ての存在は、生成として同一である」（169）こととして解釈される。

ここで、著者はストア派における「占い」と「知者」の道徳という二つの側面を共に不可欠なものと解釈している。まず道徳的〈問題〉なるものが「変形（transformation）を要求するが常にその解決に逆らう一連の緊張」として定義される（139）。この「変形」は、〈問題〉への「特異的応答」として定義されるのだが、現勢的な出来事に際して、その〈結果〉であるところの潜勢的な表面のうちで、「過去（past）としてのその出来事と結びついていた理念や強度を現在起こっているその出来事の生起とは独立な未来へと変化させる」こととして捉えられる（156）。こうした変形において、占いは、出来事や転換点の現勢的な結合の「マッピング」を行うことで未来における新たな結合を「占う」（これは知識の増大や予測と対立する）という側面に（142）、ま

[5] 著者において〈特異性〉は「物理的な創発や感情的な分裂」などの「現勢的な転回点」と「希望の変化や新たな意味の現出」という潜勢的な「〈意味〉における転回点」という二重性を持ち、現勢的な出来事と潜勢的な出来事の中の「同一性に逆らうもの」として定義される（117）。

た知者の道徳はこの（現勢的な）出来事の肯定や、その出来事の二重化および潜勢的なものと現勢的なものの区別という側面に、それぞれ関わるものとして解釈される。しかるにドゥルーズの時間論、即ち〈クロノスとアイオーン〉の区別は、時間の順序に従って起こる現勢的な出来事と、その現勢的な生起からみると過去であり、かつ未来であるような「無時間的」な永遠のうちにある潜在的な出来事という出来事の二つの面に対応していると著者は解釈している。この時間論との関係に於いて捉えるなら、この変形としての道徳的問題への応答は、現在を絶対的な始原とするバディウ等の「現在主義」と対立する、過去と未来を含む「中間」における新たなものの創出として考えられ、これがドゥルーズの新しさの理論の独自性をなすものであるという（172-3）。

そしてまた著者は、ストア派の原則を表現する、「出来事に相応しくなること」や「運命愛」などの表現が個人主義的な響きを持つからといって、この道徳哲学は個人主義的でも独我論的なものもなく、まさに共同性（community）に関わるものであるとする。それというのも、〈意味〉は諸個体・諸人格・諸世界を貫くこのただ一つの実在に関わるものであり、個体をその差異と関係させるものであるがゆえに個人主義か否かという問いに先だっているばかりではなく、著者の言う「相互規定」の論理において「理念や不定法」が表現されてあるためにはやはりその表現としての〈深層〉において区別された現勢的な個体が必要とされ、その個体間の異質性において、異質なセリーを接合し、「反−現勢化の諸条件」を構成しなければならないからである（165-6）。

第 5 章は「思考と無意識」と題されており、通常ドゥルーズが精神分析理論を用いて先に述べた著者が批判の対象にする意味において〈動的発生〉の理論を展開していると理解されている第 27 セリー以降のセリーが扱われるが、この章題が示す通りここでは「思考」の位置づけが中心的な問題となるとされる。著者はそれまでに描写された「新たなもの」や「創造」に関する理論の中で思考を位置づけようとする。つまり、〈セリー〉および〈セリー化〉という概念とのかかわりにおいて、正確に何かを指示するわけではない言語や、確定された同一性を持たない諸項がセリーとして組織されること、そしてそのような特定の内容ではないものが「無意識的な思考」として働くことによって「反−現勢化」は行われるという。恐らく、このことによって「反−現勢化」は真の意味で差異化＝微分化するものとして位置づけられ、諸々の不定法や理念が同一性ではなく差異的な規定として実効性を持つようになると著者は考えているのであろう。

また、それに加えて〈動的発生〉が、このような思考や「反−現勢化」と一体化しながら、先述したとおり「境界を切り裂き乗り越える」ような過程として捉えられることによって破壊と創造が不可分に結びつくとされる。そしてこれはドゥルーズが分裂病の例（口唇性における破壊欲動と部分対象の流れ）に於いてその表現を見出しているものとして解釈される（196-7）。そして、『意味の論理学』における理論の構築の実質を為している「実験的方法」もまた、この〈動的発生〉と一体化し、現勢的なものと潜勢的なものの間に引き裂かれた思考そのものとして位置づけられる。

最後に、「方法と形而上学」と題された結論は、非常に難解な個所ではあるが、そこでは「実験的方法」や「問題」という概念の使用を巡る、ドゥルーズ哲学と分析哲学の緊張関係が問題となる。つまりドゥルーズは、ウィトゲンシュタインが「誤った」、「典型的に形而上学的使用」として非難した仕方で「問題」という概念を使用しているけれども、なぜむしろ新たな概念を創造

してしまわないのかということである。著者は、これは「実験的方法」の本質に関わるとする。まずドゥルーズの経験論に於いて、実験的構築は、ドゥルーズの言語哲学の展開がまさにそうであるとされるのだが、既存の（哲学的・言語学的）構造や理論の「可能な限り包括的な展望」を行った上で、それらを「文学や生に於いて生み出される問題」に対して「特異的な仕方で」試してみること(test)を通じて行われるということ（204-5）、そして、先に「発生」に関して述べたように、ドゥルーズに於いて問題なのは純粋な差異の客観的把握ではなく、同一性をも含むような過程およびその中で行われる構築であるということ（207）、これら故に、著者によると、ドゥルーズはまさに〈問題〉やパラドクスの肯定としてその理論を構築する必要があったということである。

以上、著者が『意味の論理学』の中心的主題とみなすところの「開かれ」（異なる規定可能性）や「新しさ」（連続かつ断絶としての）や「創造」（破壊を含んだ）――尤も著者がこれらを厳密に区別して用いているわけではないけれども――に関する議論および、その理論の、実践および方法との関係を中心に要約を試みた。著者の解釈の特徴である、ストア派における存在と生成の区別に代えて、現勢的な出来事と潜勢的な出来事をともに生成として捉えるという点や、不定法の出来事をプラトン的「高所」に設定すること、それに伴うプラトニズムの転倒の解釈の特殊性、〈静的発生〉や〈動的発生〉の従来の解釈への批判、またドゥルーズの試みを「実験的方法」として解釈すること、これらは確かに相互に一貫した解釈であるように見えるが、果してテクストの文脈を踏まえたものなのかどうか疑問に思われる。このような特殊な解釈を「入門書」・「手引書」として提示することの是非は措くとして、ドゥルーズにおける「差異と反復」というテーマに関わる著者の理解に関わる難点を1つ（とはいえ全体に連関している）挙げておくなら、〈高所〉に無時間的にある不定法という解釈は反復の概念を現勢的な出来事の類似性あるいは（不定法という）定項の同一性によって説明するものとなってしまわないかという点が挙げられる。確かに著者はドゥルーズの独自性として、フッサールと異なり現勢的な事物と潜勢的な出来事に単純な対応関係が成立しないことを指摘している（134）。しかし実際には、著者は出来事とその反復に関する具体的な説明を同一性に基づいて行い、その上でセリーや出来事の差異化や同定不可能性を主張しているのではないか。こうなると差異は具体的な説明に全く関わってこないし、差異に関しては否定的に捉えられるに過ぎないという結果となっているのではないだろうか[6]。

（ただまさひこ　哲学哲学史・博士後期課程）

[6] 夙に「強度」という概念に関して、ウィリアムズに言及する数少ない文献の一つである原一樹の「「強度」概念再考」（『ドゥルーズ／ガタリの現在』、平凡社、2008）において彼の「質と強度を同一視する」解釈が批判されているが、同様の難点がここにも保存されている。また、ウィリアムズに於いて差異が曖昧性（vagueness and ambiguity）として理解されるきらいがある（68）。